
若社長（仮題）

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若社長（仮題）

【Nコード】

N7553N

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

タイトルはまた変えるかも。20枚です。

アメリカ帰りの若社長は、若いくせにヒゲを生やしてる。とんだカツコツケヤローだ。

ただ、仕事は確かにデキる。社長が就任してからわずか一年で社員の所得が1・2倍になった。

だけど、オレは気に入らないのだ。オレの彼女にちょっかい出してきやがる。彼女は彼女で「かつこいいねえ。若社長」なんてうつとりしてやがる。

き・に・く・わ・な・い。

オレは、若社長が彼女とホテルから出てきたという噂を聞いたとき、ぶっ殺すことに決めた。

まず、落とし穴というアイデアがある。

若社長は毎朝ジョギングをしているという。

そのコースのどっかに落とし穴を掘ってはめてやろううちゅうわけだ。

電気ドリルでアスファルトを掘ってたら、水道管を割ってしまった。

噴き出る水。

「はっはっ。あつ山本くん。おはよう」

「しゃ社長。おはようございます」

「水浴びかい？朝から元気だね。んじゃ。はっはっ」

オレはびしょ濡れになり、風邪を引き、その日会社を休んだ。

その夜、彼女が看病に来てくれた。

ベッドの上で、作ってもらったおかゆを食べながら、若社長の話になる。

「ぷりおくん、今日商談があつたでしょ。あれ、若社長が出向いてまとめたわよ。三億円の利益が見込めるようよ」

大きな商談だったので成功するとは思つてなかった。それを若社長は簡単にまとめた。

才能の差に何だかイラつく。ぶち殺したい。

「んで、A社と共同開発の例の件ね。プロジェクトチームのリーダーはぷりおくんにするって若社長言つてたわ。ぷりおくん、最近がんばってるからぜひって」

ますますイラつく。この、絵に書いたように優しい上司という設定が実にイラつく。ぶち殺そうとしてるオレがまるでダメな部下のようではないか。

「んでね。ぷりおちゃん。話は変わるけど、あたし、若社長に結婚してくれて今日言われたの」

ぶーーーーーっ。

オレは思わず、おかゆを吹き出してしまった。

「ええっ。えええええ」

沈黙が部屋を支配する。実に気まずい。

「今すぐ答えなくていいって言つてたけど、もちろん、断るつもりよ。あたしにはぷりおくんがいるもん」

「し、しかし。ロリ華。お前、若社長とホテルに」

「そんなの噂よ！誰かが勝手に嘘を広めたのよ！」

何だか怪しい。ロリ華さえ少し信じられない。

翌週、オレに辞令が下った。北極支社に転勤である。きっと、ロリ華が若社長に若社長にとって気に食わない返事をしたに違いない。

北極はしょんべんが凍ってつららのようになるらしい。

たちの悪いことに、北極支社は氷でできている。吹き荒れる風に雪。真っ暗だ。寒い。ほんまに寒い。鼻水も凍る。

ただ支社の中は意外にあつたかい。

「ぷりおくん。この書類、コピーしといて」

「わかりました」

「それと」

「はい」

「今晚、白熊ちゃんに行こうぜ」

白熊ちゃんというのは、北極にある風俗店だ。

まだ行ったことがないので、どういうところかわからない。ロリ華と会えないし、まあいいかと課長の誘いを受けた。

仕事が終わりに、外に出て、氷の車に乗り込む。透けてて中丸見え。かつこいいけど、ちょっと恥ずかしい。けど誰も見てやしないのでまあいい。

すごい風と雪の中を走っていく。道などない。

数時間たち（遠いな！）すでに、深夜の12時。白熊ちゃんに着いた。

白熊ちゃんは、やはり氷でできていた。

「まあ入ってみよう。どんなところかな」

「え。課長。常連じゃないんすか」

「初めてだよ」

何かいやな予感がするなあと思いつつ、ドアを開ける。誰もいない。

「おーい。おーい」

返事なし。

ぷりおと課長は、正面のドアに看板があるのを見つけた。こう書かれてあった。

ようこそ。いらっしやいました。まずは、着ている服などを籠に入れてください。

「お。なんだ。すでに始まつてるやん」

「は、はあ」

ぷりおはいやな予感がしてならない。なんか知らないけど、小学生のときの国語の教科書が頭に浮かんだ。

「脱ごう。脱ごう」

課長はやる気満々でコートやらパンツやら靴下やら、ドアの前にあるカゴに放り込んだ。ぷりおも仕方なしに脱いだ。

「うはあ。寒いなあ。早くプレイしたいね」

ドアの隣に矢印があつたのでそつちに進む。するとまたドアがあり、そこにも看板があり、こう書かれてあつた。

寒いでしょう。ここにクリームがあるので全身に塗ってください。

「うわあ。気が利いてる。これもプレイの一つなのかね」

課長はアホなので気づいてないが、ぷりおはもうわかった。

「か、課長。逃げましょう」

「なんで？」

その瞬間、ドアが開き、巨大な白熊が数匹飛び出した。

「あわわわわ。でかい」

「ひひひひひ」

白熊が叫んだ。

「うまそうなやつらだ。ちょっと出番は早かったがばれちゃったものはしょうがない。お前らはわしらに食われるのだ」

「ひひひひひ」

ぷりおと課長は抱き合った。がたがたがたがた震えていた。

「助けてくださーい」

「いいや。ならん」

「おかあちゃん」

外では雪が吹き荒れていた。

課長とぷりおは、結局、白熊たちに食われた。

若社長はその知らせを受け、「うむ。これはチャンスだ」と思った。今ならロリ華くんをゲットできるチャンスではないか、と。

ロリ華は悲しみに暮れていた。そりゃそうだ。いずれは結婚する約束だっと思っていたわけである。

ロリ華は首吊り自殺した。

その知らせを受け、若社長はびっくり仰天した。「な、なんてことだ！……！」

若社長も悲しみに暮れた。部屋に帰るとわんわん泣いた。オレも自殺してしまおうか。しかし、そうすると仕事が。会社も軌道に乗ってきたのに、今死ぬとなると。しかし、ロリ華くんがいらないなら死んでしまいたい。

若社長は苦悩した。

天国でロリ華とぷりおは幸せに暮らしていた。

「ぷっちゃん。ごはんできたよー」

「やったー」

二人で食べるごはんは最高だ。

ぷりおは、天国株式会社に勤務している。

若社長は、ぐだぐだ悩んでいてもしょうがない。

部下に命じ、ロリ華そっくりのロボットを作ることにした。製作費用はオレのポケットマネーでいくらでも出すと。しかし、部下はうちの会社はそういう会社じゃありませんと言うので、仕方なしに若社長は、丘の上にあるメンマ博士の研究所に足を運んだ。

「いくらくれますか」

「そうさな。これでどうだろう」

若社長は指を三本出した。

「さ、三億!!」

「違う。30億だ」

もちろん、メンマ博士は引き受けた。

メンマ博士はそれから一週間くらいでロリ華ロボットを作った。メンマ博士くらいベテランだとラクシヨである。

いよいよ、ロリ華ロボットのスイッチをオンにした。
ウイイイイイン。

実験台の上で、ロリ華ロボットはゆっくり目を開けた。

「こ、ここはどこなの」

「おや目覚めたね」

メンマ博士は、ロリ華ロボットのあまりの美しさに、ロボのおっぱいをもんでしまった。

「いやん！やめて！おじいちゃん！」

「はあはあ。ロリ華ロボ。ロリ華ロボ」

ロリ華ロボットは露骨にいやな顔をした。

ひとまず、メンマ博士の頭を叩いた。

「いててて。いいか。ロリ華ロボ。お前はこれから若社長の家に住むのだ」

「どんな人？」

「若くてイケ面で会社の社長だよ」

「わーステキ」

ロリ華ロボはガッツポーズをとった。

「おお。美しい」

「えへへへへ」

ロリ華ロボットは若社長の部屋に届けられた。というよりメンマ博士に地図を書いてもらって勝手に歩いてきたのだが（メンマ博士はただいまグアム）

「社長だけあって、なかなか広い部屋だねえ」

「えへへへへ」

若社長照れてる。かわいい。と思うロリ華ロボット。

若社長はギューってしていいかいと言う。ロリ華ロボットはいいよと言う。

「ああ。幸せ。ロボットなのにかたくないね」

「そういう材質なの。30億も出せばそれくらい作れるよ。そんなにロリ華って子が好きだったの？」

「ああ」

ロリ華ロボットはちよつとカチンときた。ロリ華ロボットは見た目はロリ華だが中身は別である。しかも、さつきから本人気づいてないけど、若社長にちよつと恋してる。

「なんか作ってあげるよ。中華と和食と洋食、どれがいい？」

「和食。うれしいなあ」

「じゃあ、冷蔵庫にあるやつ使うね」

ロリ華ロボットは料理もできる。そういう機能もついている。冷蔵庫を開けるがろくなの入ってない。

「若社長。買い物に行こう」

「えっ」

二人は腕を組んで外に出た。

ロリ華ロボットはむちゃかわいいので、みんなが振り向く。フェロモン機能もあるのだ。若社長はちよつと嫉妬まじり、ちよつと誇らしい。不思議な気分。

スーパーに入る。若社長は社長だけに、松阪牛の肉をカゴに入れようとしたりする。ロリ華ロボットはぜいたくはだめと言って、和牛のちよつと安いやつをカゴに入れる。

若社長はこの子が嫁さんになったら節約できるなあと感心する。でもロボットだからなあとちよつと残念な気持ちにもなる。

二人は買い物を終え、外に出る。「おいしいの作るね」「うん。ありがとう」

二人は腕を組んで実に幸せそうだ。

その頃、天国でロリ華とぷりおが大喧嘩をしていた。

「浮気したでしょ！何よ！この襟首の口紅！」

「うるせえ！男なら浮気の一つや二つするわ！」

ロリ華は怒って、家を飛び出した。

雲の上をとぼとぼ歩く。あたしどうしたらいいんだろう。

前から、怪しいおっさんが歩いてきた。汚い格好してる。

「へっへ。ひよつとして天国がいやになっちまったのかい」

「だ、誰！」

「へっへ。わしア、闇の業者さ。天国の住人を天使にナイショで地上に送る仕事してる」

「ええっ」

聞けば、おっさんは単に天使にいやがらせをしたいからしてるだけでお金はいらないう。言う。

「なんで天使にいやがらせをしたいの」

「まあそれは聞かないでくれ」

ライスが考えてないだけだろうか。

「ともかく、どうするよ。お嬢ちゃん」

「わかったわ。お願いします」

「よっしゃ」

おっさんはロリ華を持ち上げた。

「ええええええええええええ」

「ほい！」

ロリ華を雲の縁から放り投げた。

「きゃあああああああああ」

落下するロリ華。

「いつてらっしゃい」

ここから少しエロな描写をするので、15歳以下の子は読まないようにして下さい。

ロリ華ロボットはあそこも最高であつた。さすが30億。抜かりはない。

若社長はベッドの上で散々ロリ華ロボットのボディを楽しんだ。最高級のダッチワイフだ。「あん！あん！あん！」「おう！おう！おう！」

若社長は行為が終わつたあと、ロリ華ロボットのあるところからオナホールを外し、流して洗つた。妊娠が無理なのが残念だなと思う。

その頃、目を覚ましたロリ華は、ゴミ捨て場で寝ていた。「いててて。地上かな、ここは」

すでに朝。向こうから誰かゴミ袋を持って歩いてきた。

「あつ」

「げ」

何と、いきなり、ロリ華とロリ華ロボットのご対面である。早っ！！

その頃、ぷりおは天国で包丁を振り回して暴れていた。止めに入る天使が次々と斬り殺される。「てめえら！ロリ華をどこに隠した！」雲に散らばる天使の腕や内臓や脳……すでに169名の天使が犠牲になっている。

一方でロリ華はロリ華ロボットの案内で若社長の部屋に行った。ロリ華は若社長と結婚しようと思って地上に来たのに若社長はロリ華ロボットの方がいいと言ってロリ華を追い出した。ロリ華はどうしていいかわからず、包丁を振り回して街で大暴れした。

次々に斬り殺される人々。「ちきしょう！ちきしょう！」

すでに158名が犠牲になってる。

「169対158。いい試合ですねえ。豚の海さんはこの試合、どちらが勝つと思われますか」

「ぼく、相撲の解説がしたいよう」

わあああああああ。

スタジアムには巨大なスクリーン。片方は天国の様子。片方は地上。観客は興奮していた。

「やれ！やれ！ぷりお！殺せ！」

「ロリ華ちゃん、がんばって！ファイト！」

すでにぷりおによる天使の死者数、286名。ロリ華による地上人の死者数、298名。

えらいことになってる。

ロリ華が勝つのか、ぷりおが勝つのか。

結局のところ、ぷりおとロリ華は地獄に送られた。

「行ってくるよ」

「いつてらっしやい」

ぷりおは地獄株式会社に勤務することになった。

若社長とロリ華ロボットは幸せな日々を過ごしていた。

「もぐもぐ。ロリ華ロボットの作る料理は旨いなあ。オレ、幸せ」

「あたしも若社長といっしょにごはん食べられて幸せ。もぐもぐ」
ただ、若社長にも一つ懸念があった。会社の跡継ぎをどうしようってことだ。ロリ華ロボットはロボットゆえに子供が産めない。

11（前書き）

温泉に行かないか？ロリ華。（たけし）

ロリ華ロボットは、メンマ博士のところへ行った。

「博士！若社長とあたしの間に子供ができるようにしてください！」

「難しいと言っねえ」

メンマ博士は腕を組む。

「子供のロボットなら作れるけど」

「本物の子供がほしいです!!」

メンマ博士はどうしていいかわからない。メンマ博士は天才だが、課題が難しすぎる。人間とロボットの子供。

「一つだけ方法がある」

「
な
ん
で
す
か
！」

「ピノツキオ方式じゃ」

ピノッキオとはイタリアの物語で、木の人形たるピノッキオが最後女神様に人間の男の子にしてもらうという話だ。

「...ア、ウ、エ、オ、カ、キ、ク、ケ、コ。」

「つまり、神の力を借りるしかないというじゃないか」

「はあ」

「よしわかった。今から神様に電話してみよう」
 ぷるるるるる。

「はい。神やけど」

「もしもし。はじめまして。メンマと申します。趣味はスイカ割りです」

「何の用だ」

メンマ博士は説明した。

「ふうむ。人間とロボットの子供ねえ」

「何とかならませぬか」

「いくらくれる？」

「え」

「ただではやらんよ」

メンマ博士は若社長にもらった30億をほとんど使ってしまった。

「に、二億くらいなら」

「そんな安くちゃねえ。最低30億はいるねえ」

メンマ博士は困ってしまった。

「しょ、少々お待ちを」

いったん電話を切り、メンマ博士は若社長に電話して事情を話した。

「マジですか。しかし、ばくもうポケットマネーないんですよねえ。

困ったなあ」

「困りましたなあ」

ロリ華ロボットは泣きそうである。

11（後書き）

あなた、今、刑務所でしょ！（口リ華）

若社長はガムシヤラに働いた。何とかして30億を手に入れないといけない。焦りに焦った。

その焦りが判断能力を鈍らせた。アメリカンサーカスの宇宙人捕獲事業が100億の利益が見込めるといのでうっかり手を出してしまい、事業団が倒産。若社長の会社が60億の負債を抱え込んでしまった。

若社長はやむをえず、100人をリストラ。

リストラされた人たちが通り魔団を結成し、街で包丁を振り回し暴れまわった。

「うぎゃあああああ」

「逃げるー」

「うわああああ」

通り魔団はやる気があるので警官が撃つても全然効かない。爆弾投げても効かない。内臓がはみ出したまま暴れてる団員もいる。

警察は埒があかず、地獄のロリ華とぷりおに出動依頼をした。通り魔団には通り魔のエキスパートを。毒をもって毒を制するという発想。

しかし、ぷりおとロリ華は地獄で幸せに暮らしていた。あまり、そういうことをしたくない。

しかし、地獄株式会社の上司に「警察の要請を受けなければ解雇すると社長に言われた」と言われた。

ロリ華に話したら、じゃあしょうがないわね、ということ、二人はマシンガン、日本刀、手榴弾、包丁なども装備し、エレベーターで地上へ上った。

街では通り魔団が派手に暴れまわっていた。今月に入り、すでに三万人を越す犠牲者が出ている。

街のいたるところで死体が転がっている。

あ。ロリ華ロボットと若社長が逃げ回ってる。

若社長が通り魔の一人に捕まった。

若社長は腹を包丁で刺された。「うぎゃあああああああ」

ロリ華ロボットは尻餅をついてがたがた震えている。

そして、若社長は拳銃で頭を撃ち抜かれた。はじける頭。飛び散る脳ミソ。

ロリ華ロボットは怒って、通り魔に突進した。通り魔は発砲した。

しかし、ロリ華ロボットはロボットなので、ボディ硬化機能が作動し、弾を跳ね返した。

そして、素手で通り魔を殴った。パワーが百倍になっており、通り魔は一発で倒れた。

しかし、すぐに次の通り魔が現れて、ロリ華ロボットを取り囲んだ。

「ぐるるるる」

「うがががが」

通り魔たちは目が血走っており、よだれを垂らしている。ロリ華ロボットは怖くて怖くてついパニックになり、口の裏に内蔵されていた自爆スイッチを舌で押してしまった。

ずどおおおおおん。

自爆機能は原爆並みの破壊力があり、プリン市は壊滅的な状態になった。

推定死者数268万5000人。日本史上、最悪の事態に発展した。

無論、ロリ華とぷりおは幽霊なので何ともなかった。

ロリ華とぷりおは再び元の幸せな地獄生活に戻った。

以前と違うところはお隣に若社長とロリ華ロボットが住んでる点だ。ぷりおはたまにロリ華とロリ華ロボットを間違えそうになる。

会社帰宅中、エコバックを自転車に乗せて歩いてるロリ華が歩いているので「おい。ロリ華ー」と手を振ると「ぷりさん。あたし、ロリ華ロボットよ」という返事。顔が赤くなるぷりお。やりにくくてしょうがない。

しかも若社長は仕事がデキる。地獄株式会社に入社して数ヶ月で課長。すでにぷりおの上司。

しかも、ロリ華が若社長と不倫。ぷりおも反動でロリ華ロボット不倫。ややこしい。だいたい若社長も社長じゃないのにおかしいな。以後は課長と呼ぼう。

課長はある日、出張だとロリ華ロボットにうそをついて、ロリ華と海に見えるレストランで食事をしていた。

ぷりおもロリ華に出張だとうそをついて、ロリ華ロボットとビルの最上階にあるレストランで食事をしていた。

何だか不思議な感じである。

それはともかくとして、作者ごはんライスには彼女がいない。現在34歳であるが、彼女いない歴34年である。えっへん。威張ればいいってもんじゃない。

20代の頃は何かを成すまでは女禁止と決めたのでまあ疑問を感じつつも何とかやってこられたが、さすがにこの歳になると不安になつてくる。このまま一生彼女を作らずに死んでしまうのではないかとただ何かというのがまだ達成できてない。今のところ、何かというのは小説をプロとして何十年も続けることである。

小説を書き初めて数年、いまだアマチュア。なかなか彼女を作ることはできない。

バイトなので結婚なんて夢のそのまた夢の話。

ロリ華というのはそんなオレの憧れの子かもしれない。こんな彼女がいたらいいなあという想いがつまってる。

オレが今まで見てきた女の子が混ざってできた子がロリ華なので、実際にこういう子はいないのだが。

ロリ華ロボットについては……これは下ネタになるのでやめておこう。児童書でエロネタはいけない。カトちゃんのちょっとだけよおみたいな、かわいいエロネタはいいけどね、アダルトなエロネタをゴールデンで放映してはいけない。深夜帯ならいいけど。

しかし、今の流れからすると、しばらくは彼女が作られないなあ。とほぼほである。

何だかなあという感じである。

どうしたもんかなあという感じである。

ともかく嘆いていても何も解決しない。小説を書いていくしかない。しかし、正直きつい。特に所得がやばい。生活が相当苦しい。

自己責任は認めるが、多少企業も雇用責任を果たしてくれないときついなあ。

今の社会システムは、どうしても弱者が痛い目にあつようにできている。こいつはまずい。

社会改革。これも今後の課題。自己改革と並行してやってく。とにかく不安である。不安でいっぱいである。逃げれば逃げるほど追いかけてくる。不安が増幅する。

受け入れるのが大事かもしれない。こんなもんじゃい、よし、行けい、みたいな。

悲観と楽観を行ったり来たり。あるいは時に傍観。あるいは、そのどれでもない。

ビートルズのような。

あれは実に上手くできたバンド。

ジョン（悲観ミュージシャン）が楽曲にわさび的な厳しさを加え、引き締める。ポール（楽観ミュージシャン）が楽曲に砂糖的な甘さを加え、マイルドにする。それを傍観するジョージが達観性、渋さを曲に与える。

最後に陽気なリングが見事なドラミングで曲を支える。

ジョンだけだと暴力的だ。女の子のリスナーがつかない。

ポールだけだとアマチャンで、男子のリスナーがつかない。

ジョージだけだと地味すぎて、ビッグになれない。

リングは陽気で気のいい男だけど、さすがにドラマーだけじゃバンドは成立しない。

いいバランスのバンドだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7553n/>

若社長（仮題）

2010年10月8日12時15分発行